

工学的人間

(Ⅲ)

田中 希生

July 7, 2021

● 王はテクノロジーを死蔵すべく誕生した

【近代における人間の三度の変身】

主流となるテクノロジーの変化に応じて、人間存在もまた、変身を余儀なくされる。

- ① 熱としての人間 (19C 後半) ……ナショナルな主体としての国民 (ナショナリズムの危険性)
- ② 波としての人間 (20C 前半) ……流行を追いかける大衆 (ファシズムの危険性)
- ③ 情報としての人間 (20C 後半) ……? (???)

- 国家は、人間を熱として・波として・情報として扱い、実際にこれを統治する。
- 近代国家は想像の産物でも、実体化された関係にもとづいて構成される超越論的観念^{イデオロギー}でもない。テクノロジーにもとづいて具体的に作動する現実。
- テクノロジーのもつ特性・威力が、国家的なものの輪郭をも規定。

- ① 熱の時代の兵器……ダイナマイト (火薬のコントロール) ……国民国家を形成
- ② 波の時代の兵器……核兵器 (波動のコントロール) ……超大国・圏を形成
- ③ 情報時代の兵器……A I 兵器 (情報のコントロール) ……死の偏在化??

【王とはなにか?】

人間の自由の障害としての《王》／恐ろしいテクノロジーを預けるための《王》

前近代の《王》は総じてテクノロジーを抑圧し、多くの場合にその産物を独占して、なおかつ技術それ自体の保持者には高い地位をけっして与えなかった。

- たとえばオランダ東インド会社のスウェーデン人傭兵ユリアン・スヘーデルは徳川家光の時代に、江戸幕府に大砲の着弾計算に必要な三角関数表を提供したが、歴代の将軍はこれを死蔵。
- テクノロジーに対する、《王》のなかば無意識的な抑圧は、裏を返せば《王》という存在が歴史を通じて受け持ってきた、ほとんど宿命的な使命?
- 豊臣秀吉の刀狩り：武力の独占による民衆の抑圧か／ひとの忌み嫌う兵器を特定の人物に委ねてしまおうとする、民衆の不安から生じる秘められた意志のあらわれか。

Cf. マックス・ウェーバーの「支配の正当性」論は正しいか。

暴力を独占した権力者がその正当性を誇示するために歴史的伝統や科学的合理性、あるいは自身のカリスマを持ち出すのではなく、すべては、否応なしに、それも世界大に拡散するテクノロジーがもたらす暴力的な事態に恐怖した民衆に端を発して、特定の人物にテクノロジーを委ねてしまうときに《王》なるものは発生すると考えることもできる。

- 今日においても民衆が《王》に求めるものは変わっていない。核兵器を保持するほどの権力者に民衆が期待しているのは、このテクノロジーをもっぱら独占し、比喩的にいえば作動スイッチを握りしめたまま、死蔵することである。

【王と官僚】

歴史的には、技術官僚について、これを^{テクノクラート}王の命令に唯々諾々としたがう手足のごとき存在とみなすことに、われわれは慣れている。しかし、テクノクラートからみれば、まずもってしたがうのは王ではなく技術的合理性である。

- 技術的合理性……科学的合理性とは異なる合理性。科学的合理性よりもはるかに拘束力が少なく、科学的実験の失敗はたんに非合理性の発露、想定していた計算の非現実性を意味するが、技術的実験の失敗は成功同様にひとつの現実を意味できる——もうすこしいえば、ダイナマイトの意外の暴発は科学的には非合理だが、技術的合理性はこれを兵器として使用することを許容する。つまり科学的合理性よりも極端な推進力をもつ。
- 王の存在は、潤沢な資金を提供してくれるとき以外には、一種の足枷。しかし逆にいえば、**王の存在は、こうした人間のテクノロジカルな暴走を抑制する重要な人類史的叡智とみることもできる。**

【近代人の「王殺し」】

王殺しの伝説：ローマ帝国の時代まで、ローマ近郊、ネミの森の湖畔には「森の王」（祭祀王）がいた。彼は、もとはローマの逃亡奴隷であり、前任者を殺して祭祀王となる。森は「ディアーナの森」と呼ばれ、湖は「ディアーナの鏡」と呼ばれる。かたわらには黄金の木があり、その枝は金枝と呼ばれた。「森の王」の任期は、ふたたび逃亡奴隷によって殺されるまで。ただし、約束事がひとつあり、祭祀王と戦って新たに「森の王」となるためには、湖畔にある「金枝」を折らなければならない。

- ただし、近代人という名の解放奴隷は、「王殺し」を実行したものの、自身は王位につかず、祭祀を守ることなく、金枝＝テクノロジーを振り回している。
- 王殺しによりテクノロジーの抑制装置が解除され、人間は一挙にテクノロジカルな変身可能性を——おそらくその本来の姿を——回復した。テクノクラートには、もはや王の指令にしたがう必要はなくなった。彼がしたがうのは技術的合理性のみ。
- テクノクラートたるわれわれは、決定的な大量破壊兵器の登場にいたるまで、技術的合理性が指し示しているバラ色のはずの未来に向けて、その道を突進した。そしてその結果生まれた最終兵器を死蔵すべく、あらたな社会契約が暗黙のうちに結びつけられ、ひとつとはふたたび王を誕生させた。それが、アメリカ合衆国の大統領である。だからその後、核兵器は王位を望む者にとって、悪魔的な魅力を有した。いまでもその魅力は変わっていない。

● 精神の技術——王政復古か、芸術か

A I が勃興するなかでの規制については、テクノロジーの黎明期には何千もの花を咲かせるべき、とい

うのが私の考えだ。その際、政府は研究内容についてはあまり関与せず、予算については大きくサポートし、同時に基礎研究と応用研究との対話をうながしていくべきだ。

その後、テクノロジーが次第に成熟して、それが既存の社会的枠組みと相容れなくなってきたとき、問題はより複雑になる。そうなったときに政府はもうちょっと関与を増やすことになるだろう。それは既存の枠組みに押し込めるべく規制するということではなく、規制があくまでも、さまざまな価値観の反映としてあるようにするという意味での関与だ。テクノロジーが特定の人々や集団に不利益をもたらすものであってはいけないからね。

(「BARACK OBAMA LAST MESSAGE FROM THE WHITE HOUSE」『WIRED』Vol.26、2017年1月)

- 彼のテクノロジーに対する物分かりのよさは、近代民主政体下の為政者としては敬意を表すべきものであっても——また彼のような人物がいるかぎり、AI兵器においてもアメリカは最先端を走るだろう——、視点を変えて、テクノロジーの抑制を待むべき王とみる場合には心もとないもの。
- 王の死、すなわちテクノロジーの抑制解除によって、人新世と呼ばれる地質学上の年代を到来させた近代の人間に必要とされているのは、もっと完全な、つまり暴力的な事態をもたらす可能性をもつテクノロジーそのものを抑制し、できることならこれを死蔵する、王政復古なのだろうか？
- しかし、そこに可能性はほとんどない。秀吉やナポレオンのごとく、けっきょくは独占した暴力の使い所を求めて、あらたな戦場を作り出すほかなくなる。
- そして大半の王は、贖罪山羊に歴史的な、重苦しい衣裳を着せたにすぎない。世界中に散らばっている、また散らばりつづけるテクノロジーを独占＝死蔵できるほどの強力な為政者の登場に期待するのは得策ではない。

【工学的人間】

すでに三千年前のギリシア人がオイディプスの伝説に寄せて認識していたように、人間はテクノロジーなしに生をまっとうすることができない。人間は狂ったように前進する動物であり、テクノロジーはときに部分的に失われることはあっても、原理的にけっして後戻りはしない。だからわれわれに可能なのは、どんなテクノロジーならば、よりよい未来を実現できるのかを問うことだけ。

【ヴェルラムのベーコン】

17世紀のヴェルラムのベーコンは、今日でいう「芸術」をも意味した「^{アルス/テクネー}技術」について、これを「精神的なもの」と「有用なもの」とに区別しつつ、後者を称揚した最初のひとであり、近代技術思想の発源地点となった。(Cf. 『学問の進歩』服部英次郎・多田英次訳、岩波文庫。)

- 要するに、技術／芸術の前近代的な渾然一体から、技術が分離。
- 逆にいえば、《王》だけでなく、「精神の技術」である《芸術》もまた、技術の無方向的な発展をおしとどめる重要な鍵となりうる。

【外なる精神としての自然＝芸術】

「精神の技術」である芸術は、たんに、外的な技術と区別される内的な技術を意味しない。芸術は「作品」をとまなう。むしろ、外に向けて投げ出された精神。(Cf. 自然主義文学者による私小説。)

- ところで、自然＝《巻き込み》。技術は、人間がこの《巻き込み》に自ら参与する力。
- 逆に、ギリシア人のテオリア（理論）は、《巻き込み》に反対するように、対象を見尽くし、むしろ対象を遠ざけつつその距離を測ることである。もっといえば、対象とわれわれとのあいだにひとつの間隔^{ゾーン}を設けること。芸術作品とは、外なる自然でも、内なる精神でもなく、そのあいだにある《間隔》それ自身。

個々の芸術作品を考えてみよう：詩でも、絵画でも、彫刻でも、音楽でもいい。作品とは、たんなる自然のミメーシス^{ミメーシス}（自然の取り込み）ではない。むしろ、自然と作家とのあいだに設けられたひとつの間隔^{ゾーン}である。したがって自然にも似ているが、作家にも似ていると考えることができる。

【われわれの未来の二つの可能性】

- ① テクノロジーを死蔵させる、絶対的な力をもった王政復古の可能性。
- ② 《王》を欠いた古代ギリシア人の編み出したテオリアの可能性、いいかえれば精神の技術たる^{アルス}芸術、さらにいえば精神をその意味で用いるかぎりにおける、^{アルス}人文学の可能性。